

## 論文の和文要旨

論文題目	ジャワ語の敬語に関する記述的研究 —第三者敬語を中心に—
氏名	Sri Budi Lestari (スリ・ブデイ・レスタリ)

本研究は、第三者に対する敬語使用の分析を通じて、現代ジャワ語の敬語の諸特徴と現在進行中の敬語の変化の様相を明らかにした。日本語の敬語表現を基準にとって世界の敬語表現を分類した場合、ジャワ語の敬語は「日本語型」に含まれる。つまり、日本語のように丁寧語、尊敬語、謙譲語にあたるものを持っている敬語体系である。世界の敬語について語る際に、ジャワ語の敬語は日本語と朝鮮語の敬語と同様に、複雑な敬語体系を持っている言語として例示される場合が多い。この3言語のうち、特にジャワ語の敬語は実例に基づく記述的研究がほとんど存在しないものの、「非常に複雑である」、かつ「絶対敬語的である」とよく指摘されている。

本研究は分析と考察の内容から、大きく3つの部分に分かれている。まず、複雑であるとされているジャワ語の敬語体系を従来の分類法とは異なる捉え方によって整理する(第2章)。次に、敬語体系の全体を把握するために、敬語を対者敬語と素材敬語に分け、素材の中の第三者に注目し第三者に対する敬語の使用特徴を明らかにする。これまで第三者敬語に関する問題は扱われてこなかったため、どのような運用法を持っているかを把握するためにジャワ語の教科書や雑誌などの書かれた言語資料を用いて第三者に対する敬語使用の規範あるいは「正しい」とされる運用法を探ってみた(第3章と第4章)。最後に、その分析によって明らかになった第三者への敬語使用が実際の日常会話においてどのように行われているかについて、アンケートおよび面接を用いた実態調査で明らかにした(第6章～第8章)。

本研究は日本語の敬語研究史で広く採用されている「絶対敬語」と「相対敬語」という概念を枠組みとしてジャワ語の第三者敬語の現象を捉えようとするものである。本論文の全体の結論では、現代ジャワ語の第三者敬語の使用傾向を、近年の研究で実証されている

日本語と韓国語の事例と照らし合わせ、通言語的にジャワ語における敬語の変化の流れを推測する。以下では、各章で明らかになった具体的な事例について述べる。

第2章ではジャワ語の敬語体系について包括的に説明している。主として語彙の取り換えにより敬意を表わすその体系について、先行研究に基づいて敬語表現の作り方、敬語語彙の構成、丁寧さの段階、敬語の発生に関する議論などをまとめた。2.1節「敬語の体系と分類」では、これまでの研究が、ジャワ語の敬語について対者敬語の観点からしか扱ってこなかったことを示した。また、対者敬語の問題であるにも関わらず、後に第三者への敬語表現も体系の中を含めたりしており、体系を複雑化していることも指摘した。さらに、本論で引用した先行研究も含めて、これまでの先行研究は敬語の分類にこだわりすぎるきらいがある。この分類法は対者敬語中心の観点から離れていないため、ジャワ語の敬語全体の性格を反映させることができていないと考える。これに対して、本論文は先行研究の敬語分類で挙げられている用例を、単に丁寧さの諸段階には分けず、対者敬語と素材敬語の分類の枠組みの中に当てはめてみれば、きれいに整理できることを示した。

第3章と4章では小学校から高校までのジャワ語の教科書、そしてジャワ語の雑誌を対象に、メディアで見られる第三者敬語の使用を明らかにした。この2つの異なるメディアにおいて、確かによく言われている絶対敬語の特徴が顕著に現われている。例えば、小学校の教科書で生徒がクラスの前で先生と話す場面において自分の父親に言及する際に、父親に対して尊敬語を用いた用例が観察された。友人と話す場面においても自分の父親を持ち上げる例が得られた。父親よりさらに上位者の親戚の前でも父親を上位待遇する用例も存在した。教科書が「正しい情報」、「子どもが学ぶべき知識」を盛り込まれるものであるとすれば、そこに現れるこのような敬語の運用法も、現代ジャワの社会で正しくなおかつ規範的とされるものであろうと考えられる。

雑誌の分析結果からは、雑誌が記事の中で社会的に地位が高いとされている人物について書く際に、敬語が必須的あるいは高頻度で用いられていることが分かる。また、体験談の投稿において読者が自分の身内に言及する際に敬語を用いる例もあった。上位者がどのような状況でも、聞き手が誰であっても絶対的に持ち上げられるような敬語体系が存在することが3章と4章の分析から分かった。

メディアの分析から第三者敬語の運用法を確認し、それを基に実態調査を行った。第6章では予備調査の結果をまとめた。この予備調査の結果からは、家庭内における既婚男女の絶対敬語的な特徴、そして高校生と大学生による第三者敬語の不使用の傾向が窺える。また、尊敬語の語彙(Krama Inggil)のうち、機能が丁寧語化したものや敬意度が下がってきているものがあることも見受けられる(例えば *paring* 「お与えになる」や *sare* 「お休みになる」)。

予備調査の結果を考慮に入れ、さらに高校生・大学生と社会人を対象に第2次調査を行

った(第7章と8章)。この調査からは、社会人のグループにおいては学校の教科書と雑誌で観察されたような敬語の運用法が見られることが分かる。具体的には、聞き手敬語の使用/不使用と関係なく、第三者敬語の使用率が高い。つまり自分と同等な関係にある人または下位者と ngoko 体(常体)で話す時でも、上位者と krama 体(丁寧体)で話す時でも、自分との関係からみると上位である第三者を常に上位待遇する傾向が強い。第三者に対する敬語使用はもっぱら話し手と第三者との上下関係を基軸にして決定されると考えられる。

一方、高校生と大学生においては、一部の話者を除いて社会人で見られるような敬語使用の傾向があまり現われていない。第三者が父親の場合、krama 体を必要としない聞き手と話すときに第三者敬語の使用率が低く(高校生は17%~26%、大学生は17%~28%)、krama 体を必要とする聞き手と話すときに第三者敬語の使用率が高い(高校生と大学生は共に60%以上)ことが明らかになった。また、第三者が学校の先生および校長/学部長の場合にも似た傾向が見られている。現代日本語の敬語でも観察されている、第三者敬語が聞き手敬語と連動して用いられる、いわゆる「第三者敬語の聞き手敬語化」の現象である。

金(2005)は日本語と韓国語の第三者敬語を対照して研究している。日本語は聞き手を敬う手段として、より第三者を高める方向へ進むと予測されるとしている。絶対敬語が基調である韓国語においても敬体を用いない親しい聞き手の場合は上位者である第三者を高めない傾向があることを明らかにしている。ジャワ語の若年層である高校生と大学生が現在の第三者敬語の運用法をそのまま身につけると仮定されると10年、20年後には、ジャワ語の敬語は全体的に話し手と第三者との上下関係より聞き手への配慮が優先される敬語体系になっていくと予測可能である。そして、これは日本語と韓国語の敬語変化の流れと一致していると考えられる。無論、敬語の変化を探るには経年的調査が必須である。本論文の成果を今後の継続的調査のための、一つの里程碑としたい。